

不安と希望

園長日記(1)

周 郷 博

四月一日附で附属幼稚園長併任の辞令を坂田文部大臣からもらった。四月八日に入園式があり、それから、もう二週間以上もたってしまった。

大学の園長選考委員会で、私が幼稚園長になることを言いつけられたのは、一月のはじめで、そのとき、井上(茂)学部長から「周郷さんは、小学校と幼稚園とどっちのほうがいいかね?」と言われて、「小さいほうがいい」ということで幼稚園長になることにした。幼稚園長といっても「長」なのである。生来事務的ではないし、また生来「長」アレルギー」みたいなものをもっている(らしい)私は、表面平静をよそおってはいっても「これはないへんなことになっちゃったぞ」と、おおげさにいえば「驚天動地?」の心境を味わっていた。

たまたま、そのころから、大学紛争が私のお茶の水女子大学にも波及してきた。一月十九日ごろの東大の安田講堂は、二・二六事件にも似た内戦を思わせ、そうして時代の転機を印象づける騒動とみられた。私の大学は、学生数一、六〇〇名ほどの、しかも女子学生だけの小じんまりした大学で、学生部長が「つるし上げ」られて病気になる、学生部長室が少数の反代々木系「全学斗」の学生に「占拠」されたりしても、收拾のつかない暴力沙汰にはならないで経過してきている。しかし、他の激しい紛争の渦中にはいる大学に通じる緊張は経験した。緊張の中で、いろいろと余病もでた。そういう、他の大学のように深手を負わずにいることで、日本の大学全体が当面している問題の深さを、いくらか距離をおいて眺め考えてみる機会にめぐ



まれたと思う。

大学紛争の緊張のあいだに、私は何かの機会に「メダカノガッコウ」という童謡を思い出して、ひとりりでヘンな空想をした。

この童謡は、私の友人茶木七郎君がつくった童謡で、たいていの人が知っている。そのなかの「ダアレガセイトカ／センセイカ」というところが紛争中の大学の団交や封鎖、「つるし上げ」の教授先生と学生たちの交渉の場面をさながらに映しだしている感触にハッとした。

「ダアレガセイトカ／センセイカ」と二回繰り返えして童謡ほうたう。ことし停年退職した理学部長、岡(徹)さん(三代ほど前のきびしい学生部長だった)の研究がメダカの研究であったためか、いずれは幼い園児たちの友になる園長というしごとが心のどこかにひっかかっていたのか、エスカレートしてゆく、陰湿な学生暴動の荒れかたと、茶木君作るところの童謡とが、妙に重なって心の鏡に映ってきた。

浅野(順一)先生が昨年、東大紛争がけわしくなりかけたころ、ある集会で「東大には(一般にいまの大学には、という意味で)『研究者』はいるだろうが、『教育者』はいなくなつたのではないか」と戦後の時代の移り変わりを心配

し嘆いて言ったことがあった。そんなことも心にかかっていたのだろう。「ダアレガセイトカ／センセイカ」茶木君の、このどかな時代の童謡は、いま、ひどく皮肉な意味をふくんだ戯画として、奇妙な像をむすぶ。

空想をたくましくすれば、「メダカノガッコウハ／カワノナカ」という歌い出しのその「河」は、「流れて」いない(水源に発して清らかに流れている「河」ではない)濁った「溜り水」であるのかもしれない。

この「溜り水」という暗喩(たとえ)も、私には思いつきではなく、昨年八月十五日奈良の岡(潔)先生のお宅で、食後の雑談中に、先生が私に話したことばから、ずっと私の心にある一つの問題を投げかけていたもので、きわめて自然に、いまの問題とつながりをもってきた。岡先生は、ある作家と対談して後味がわるかったようすで、「戦後の日本の多くの作家は、高度経済成長という『溜り水』にわいたボウフラだ」と上気嫌で断定的に私に言った。私の心の中では、作家やテレビタレントや流行歌手ばかりでなく、学校教師、大学教授という人たちだつて、ひょっとしたらこの『溜り水』にわいたボウフラになりかねないぞ! という、何かきびしい反省がずっとあった。

中国人盛饒度さん(清朝の名門、いまは中国料理店『留

園「社長」が、たった一度の敗戦で萎縮して視野が狭くなり、「富園他兵」か「富園放心」で、遠大なものの見かた、人間の大きさを失って「小粒に」なってしまった日本人を憂えて書いた「野火焼ケド盡キズ」という小冊子の発想でいえば、勇ましく急流を遊泳する鯉だった日本人は、いまは見ちがえるような小さな、あのメダカに変身してしまったのかもしれない。

こんな空想―想像の連鎖は、直接には問題をすこしも解決することにはならないだろう。ノンポリ学生をふくめて、過激な行動に走る学生たちに対する腹立たしい非難も多く語られた。手塚富雄氏がいったように、この学生たちの暴走は、「周囲のただならぬふんい気に泣き立てる赤ん坊」のようなところが、たしかにある。その「周囲のただならぬふんい気」というものの正体はなんだろうか。私たちは未ださだかでないその正体を、おとなとして、教師として感知し、見とどけなくてはならない。その観点からいえば、彼らの暴力を憎んでも、彼らが「暗に」提起している問題を、彼らといっしょに考えて、健全な方向にカシをとる勇気を私たちはもちたい。こういう事態を生んだのは、戦後の「教育」に責任がある。その「教育」と「溜り水」的な日本社会の濁りが、こういう結果を生んだのだと

いえる。

私は、反動的という批判をうけるかもしれないけれど、敗戦によって、なぜ広瀬中佐の銅像と、小学校の入口にどこにも立っていた二宮金次郎の銅像を、アメリカ占領軍のご気嫌どりのようにさっさと壊してしまったのであろうか、ということまでも考えてみた。

二宮金次郎については、腹黒い政府の政策に利用されてきたという見かたも成立つことは私も知っている。ドグマ（教義）にして使われるのは好まないが、内村鑑三も「代表的日本人」の中に挙げているほどで、いま考えてみれば、学校がなくても、どんな不利な条件の下においてでも、労働し、学問をする人の典型として見なおされる「人間像」を、そこに感じる。小学校の入口に二宮金次郎の銅像が親しい者として立っているのは、いわば「学校否定」という人間の位置づけとさえ見られる。そういう学校がなくとも、労働を愛し、勉強し学問をするという「人間の掬りどころ」としての「学校否定」とともにしか「学校」は意味をもち得ないのではないか？

ところが、戦後は「学校万能」という片輪な風潮が生まれ、その学校が「特殊部落」のように「よどんだ溜り水」化してきている。

「学校」以外の教育(的な感化)は、家庭から社会全般、全く野放しにコマーションシャルの強烈な宣伝に荒されっ放しで、「学校」はテストと成績、点数取得の砂漠みたいなものになりかけている。勉強、学問に、驚きと発見の喜び、若い人々の生きがいと刺激する、生の味わいがなくなってきた。大学へはいつてきた学生はほんとうに勉強し学問しようとしているのかどうか？ 味気ない試験を、なんの総合的な(人間観、人生観とでもいう)関係もつかず通過してきて、「正しいか」「正しくないか」の二つの答えしかないような、幅のせまい回答をもっていたずらに騒ぎ立てる。

広瀬中佐の銅像については、こんどは大学側の反省になるが、日露戦争というものに必ずしも関係させなくともよいはずで、部下である杉野兵曹長を思うような上長の思いやりが、いまの日本人からは消失してしまったのか、という反省から、こんなことも考えてみたのだった。

こんないら立ちのなかで、ちょうど私が関係してきた、千葉県の市川の養護学校(中学段階)の十九名の生徒(精薄)の卒業記念の詩集「いずみ」第三集ができて、私のところへとどけてきてくれた。ことし十五歳で卒業して、それぞれ職場で仕事につく、彼らの中の一人、服部(正弘)君

の「ばかもの！」という次の詩を、私は、誰ということもなく、学生たちにも反省してもらいたい気持ちで、学生の立看板と並べて、私ひとりを出してみようかと思ったりもした。

ばかもの！

ばかもの！

人間たち！ こんなことで

人類のつばさが うごくか！

いつまで下で バタバタと

あらそっている！

天国は わずれたか！

ぼやぼやしている

この私が おこるぞ！

かみなりのでっかいのを

おっことすぞ！

あまったれるのも

いいかげんにしろ！

服部君たちのことをくわしくは書かない。が、この「あまったれるのも／いいかげんにしろ！」という結びは、私

たち誰も胸中ふかく打つものがあるだろう。

——こうして、いまの日本の果てしれぬ大学紛争に象徴される日本の根本的建て直しを、私は今の「大学において」ではなく、日本の若い人々の「育見と教育という場」で、ある責任（大きな責任）をもって、そこへ舞台を移してしなくてはならない自分の位置について考えてみなければならなくなってきた。大学から逃げるわけではない。この人類的な、グローバルな大きな転換点に立って、日本の大学が、人類の永続的な理想を打立てるために、個々の真理とともに総合された真理と世界観を打立て、学生たちとともに今日の大学の使命を明らかにすることは、大学人が果たさねばならぬ大きな課題であり、私も及ばずながらその大きな課題に「参加」している。

お茶の水女子大学は、蠟山先生が基礎を据えた「総合コース」を中心に、大きなヴィジョンをもって、大学共同体というものをつくりあげるだろう。

私が、その大学の附属幼稚園の園長になる。明治九年にできた、「全国の幼稚園の風上」そこに先生が笑っていて

下さるだけで、たのしいふんい気が流れてくるにちがいないません」そんなふうには、羽仁説子さんが、人づてに噂をきいて二月初めに手紙をくださった。あるいは、この幼稚園も、東大と同じように、もうとっくに一つの使命は終って、この時代に新しい使命を見つけたかなければならぬところへ来ているのかもしれない。

園長室も明るくなった、と卒業生も教師たちも言い、外部の人も何か明るいニュースのように感じて手紙をくださる。

しかし、私の中にはうず巻く不安と希望が未だ不定形で錯綜し、「エンチョウセンセイ」と小さい人に親しげに呼ばれて戸惑い、はつきりした解釈も判断もつきかねている。

「大学とは何か？」と同じように「幼稚園とは何か？」という問いに心をいためる。日が経つに従って、離れて「見て」いたのと違う、歴史と伝統の重みもわかりかけてきている。

（お茶の水女子大学教授、同附属幼稚園長）